「お前、北山…」
「柴犬か」

港へと抜ける十字路。
時折、トラックが走る以外はがらんとした通りのど真ん中で、柴田刑事と北山は鉢合わせした。

「真山が見かけた刑事ってのは、さてはお前か。ワン公ふぜいが尾道くんだりまで何の用だ」
「ゴロツキ探偵ごときに話す事なんぞあるか、アンタこそ血相変えて何してる」

ズカズカと互いに歩み寄り、額のぶつからんばかりの距離でギリギリと視線をねじ込み合う。

「ここは管轄外だろ、とっとと消えな。お前がうろつくとロクな事にならねぇ」
「そっちこそ。どうせつまらん仕事だろうが。お上に向かって『ゴミ漁りの邪魔だ』とはいい度胸だ。ぶち込むぞ」
「やってみな青二才」
「吠えるなよジジイ」

……

つかの間、睨み合った。
北山が一歩さがり背を向ける。

「わめくだけわめいて退散か？」
「今、お前に構っている暇はねぇ」

走り出そうとした北山がふと足を止め、ゆっくりと柴田の方へ向き直った。

「なんだ、まだ吠え足りな…」
「おもしろい事を教えてやる。東京から旅行に来ている若者二人が暴漢に襲われた。一人は重傷、一人は拉致された」
「何だと？」
「東京と違ってデカい顔は出来んだろうが、所轄とつるむくらいなら何とかなるだろ。どうする？　事件だぜ」
「フカすな。貴様の寝言など信じると思ってるのか」
「その辺の大きめの病院に電話してみな。かなり酷くやられてたからな。堀川って坊やだ」

その名を聞いた柴田の肩が、ぴくりと動いた。

「それを早く言え」
「あん？」
「いい事を教えてもらった。ひとつ貸しとくぜ、オッサン」

言い終わらぬうちに、今度は柴田が北山に背を向け早足で歩き出した。

「なんだ？　えらく簡単に食いついたな…まぁいいか」

あの外道どもの狙いは、俺達をお嬢の捜索に向かわせ足止めする事だろう
柴田の奴が地元警察を動かしてくれれば、少なくとも真山は自由に動き回れることになる

傷付いた坊やの警護もしてくれるだろう
俺は…

北山は港の奥へと視線を飛ばし、両手を重ねバキボキと指を鳴らした。

さてと
白馬の騎士ってがらじゃないが
いくか

沖にぽつんと浮いた小島。それが彼の目当てだった。

◇

「碧ちゃん、大丈夫？」

椅子に仰臥し、あえぐ碧の額を濡れタオルで拭いながら、恵美子は良心の呵責と闘っていた。

こんな小さな子になにさせてるんだろ
もがいて、苦しんで…
それでも何とか秀司さんを助け出そうとしてくれている
私、この子にこれほどの苦痛を強いる資格があるの？

碧の顔色は紙のように白く、拭っても拭っても玉のような汗が額に吹き出してきた。
誰かが見たら、あまりにも明白な死相におじけをふるったかも知れない。
それでも恵美子は止めなかった。

あと、少し
あともうちょっとで、彼は昔のように微笑みかけてくれる
何も無かったように話しかけてくれる
あとチョットなんだ
この子が苦しむのも、あとチョットだけ

目を開けた碧が、憔悴し切った顔でニコリと恵美子に笑いかけた。

「…だいじょうぶだよ。あと少しでおにいちゃんのいる所まで行けそう。でもちょっと休ませて。ワタシ疲れちゃった…」
「わかった。少し休もう。まだ時間はあるから」

碧のけなげな言葉に恵美子は泣きそうになった

この子はこの子なりに、事情を理解し、自分に出来る事をやろうとしている
難しいことは判らなくても、自分が誘拐同然に連れ出された事くらいは判っている筈だ
それでも、この子は協力してくれた
いいえ、これはもう協力なんて生易しいものじゃない

献身…いきどおり…

多分、私の『声』を聞いたのだろう
そしてこの子なりに理解した、私のことを
碧ちゃんには、たとえそれが自分の事でなくとも『大切なひとを失う』というのが許せなかったのかもしれない

くるしい
この子だけじゃない、やらせている私も彼女以上に苦しい
でも…でも、やらなきゃ
やるんだ

恵美子は立ち上がり窓のカーテンを開けた。

瀬戸内を一望にする景色を眺めながら、想いは別な所へとんでいた。
碧がその窓をじっと睨んでいた事に、恵美子は気づかなかった。

◇

尾道市内。某病院。
殉をかつぎ込んだ真山は、ベッドに寝かされた彼を見届けると外へ飛び出てゆこうとした。

「待って！　今、何か見えた」

殉の言葉に、ドアに手を掛けた真山が振り返る。

「景色…海が見える…ここは？…」

真山は慌ててベッド脇の椅子を引き寄せた。

◇

ぽつんと１つだけある明かり取りの小窓。
差し込む陽光も、壁の隙間から漏れてくる光も、いつの間にか弱々しい紅色に変わってきていた。

もうすぐ陽が沈むんだ

加夏子は溜息をついた。
何とかしなければと思っても、ここから逃げ出す方法など思いつかなかった。
思いつかないまま時間だけが過ぎてゆく。

さかな、おいしかったな

こんな状況でも、しっかり出された物は平らげる自分がちょっぴり情けなかった。

うぅん、食べなきゃ
腹が減っては道草もできないって言うじゃない

あれ？　道草…だったよね？

妙なところで思考が堂々巡りを始めた加夏子の耳に、またあの酷い音が飛び込んできた。
蟹男…ヨシオが戸口に立っていた。

「ちょっとはやいけど、よるごはん、もってきた」
「ありがとう。でもまだお腹すいてないよ」
「でもおねえちゃん、ずっと小屋のなかにいたらおなかすいちゃう。ボク、じっとしてるとおなかすくし」

加夏子は苦笑した。
ヨシオとの会話で、自分をさらったのが誰かを知った。
地元の漁師。でも漁るのは魚だけではない。ヤクザの下請けで密輸まがいの事も平気でやる。
多分この辺りでは鼻つまみ者の集まりなのだろう。
あの時、加夏子をさらうよう指示していた年輩の男がヨシオの父親だという事も判った。
そして、今自分の目の前にいる異形の蟹男、ヨシオが何の悪意も抱いていない事も理解出来たのだ。

このコは、父親の言うがままになってるだけだ
見かけはかなりグロいけど…
本当は悪事なんかに関わるような子じゃない、優しい子なんだ
何とかしてあげなきゃ

自分の立場も忘れ思った瞬間、加夏子の脳裏に１つのアイデアが閃いた。

「ねぇヨシオ、私と一緒に外に出ない？」
「え？」
「ヨシオは今までどんな所にいった？　遊園地とか見た事ある？」
「ボク船しかしらない。とうちゃんが『いっしょにこい！』って。こわいものもいっぱいみた、いやなかんじだった」

ヨシオが、ただでさえ小さな目を更に小さくすぼめた。

「ボク、海、きらいだ」
「行こうよ！　連れてってあげる、楽しいところへ。嫌な事ばかりじゃないんだよ」

加夏子はヨシオにむけて手を差しのべた。